

平成 23 年 5 月 16 日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2007～2009

課題番号：19320073

研究課題名（和文） インドネシア人就労者による第二言語自然習得に影響する要因の多角的
研究研究課題名（英文） A research on the second language acquisition by Indonesian migrant
workers from multiple views.

研究代表者

助川 泰彦（SUKEGAWA YASUHIKO）

東北大学・国際交流センター・教授

研究者番号：70241560

研究成果の概要（和文）：

インドネシア人就労者の日本語 OPI データに基づき、日本語習得の促進要因、および阻害要因について質的調査を進めた。また、水産加工業、農業の労働現場および医療サービスを受ける場面での参与観察を行った。日本語習得の促進要因は、100 人中 5 人いた中級レベル話者にインタビューを行った結果、ソーシャルネットワークが重要な要因であることが明らかになった。一方で阻害要因は OPI レベルが初級下に留まっている 5 名にインタビューを行い、社会活動の実態と日本語能力との関係を分析した結果日本語社会への心理的・社会的距離が一番の阻害要因であることが窺われた。

研究成果の概要（英文）：

A qualitative study was made, based on the results of OPI, to reveal the causes which promote or obstruct the second language acquisition by Indonesian migrant workers. The interviews of five good learners suggested that social networking might be an important factor. On the other hand, obstruct factors seemed to be either psychological or social distance between the Japanese society and them.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	2,800,000	840,000	3,640,000
2008 年度	2,400,000	720,000	3,120,000
2009 年度	1,900,000	570,000	2,470,000
年度			
年度			
総計	7,100,000	2,130,000	9,230,000

研究分野：日本語教育

科研費の分科・細目：日本語教育

キーワード：インドネシア人 移民労働者 日本語習得 OPI

1. 研究開始当初の背景

(1)茨城県大洗町には1990年代からインドネシア共和国ミナハサ地方出身の移民労働者のコミュニティが発展し、最盛期には千人を越えていた。滞在期間は平均5年程度であるが、中には10年以上滞在するものもいた。しかしながら、観察してみると大多数が単語を並べただけのピジン化した日本語をしようしている様子が窺え、滞在期間や職場での日本人との接触が必ずしも日本語の習得につながっていないことが予想された。

(2)どのような要因がこうした移民労働者の日本語習得を阻害しているのか、また一部の日本語が上達したものについては何が習得を促進しているのかを調査することにした。

2. 研究の目的

(1)移民労働者の日本語習得を阻害している要因を明らかにする。

(2)例外的に日本語コミュニケーション能力の高い移民労働者について、何が習得を促進したのかその要因を明らかにする。

3. 研究の方法

(1)予備調査

就労者の生活実態については予測のつかない面が多くあるため、まず、インタビューにより情報を収集した。^(注1)また、日本語力を測るために語彙、発音、文法のテストを行った。^(注2)なお、調査の大部分はインドネシア語で行い、一部で日本語を使用した。

① 自由なインタビュー：職場と日常生活について

② 半構造化インタビュー：以下のようなトピックについて

- ・ 来日前の仕事
- ・ 来日前の日本語学習 ・ 現在の日本語学習法
- ・ 職場での日本語使用
- ・ 日本語にまつわる困難
- ・ 日本人や日本社会に関するイメージ
- ・ 帰国後の展望

③ 語彙力（数詞、基礎的な名詞、動詞、形容詞）の知識の測定、特殊拍の発音能力、動詞のテ形とナイ形、形容詞、形容動詞、名詞ダの否定形式の知識のテストなど

(2)参与観察

①教会活動の参与観察

牧師の許可を得てインドネシア人教会の礼拝や行事に調査に行く度に参加した。その際、教会活動で必要になる日本語への翻訳（日本人への招待状の作成など）や日本人参列者がいる場合には通訳業務（インドネシア人牧師の挨拶やインドネシア人ゲストの挨拶など）を手伝うことがあった。またイースターや日曜日のピクニックやスポーツ行事

にも可能な限り参加して、活動を体験したり見学したりした。^(注3)

②労働現場の参与観察

就労者の勤務先の日本人経営者の許可を得て、水産加工業の工場見学を数回行った。また、銚田市の農家で一日農作業を手伝い労働現場での日本語使用を参与観察した。作業終了後にも宿舎を訪問して夕食の支度や近隣の日本人やインドネシア人との交流の様子を観察した。

大洗町内の中堅水産加工業者の工場内を見学し、作業風景や日本語使用の実態を観察する機会を得た。前述の農作業とは異なり、干物製造では原料の魚の名前、魚の大きさ、味付けの種類、箱に詰める匹数を正確に把握して指示された通りに製品を梱包し、間違えずにラベルを貼る必要がある。製品ミスがあると大量の返品があり、大損害を被る危険性がある。この工場では箱の中身が分かるように、様々な色のガムテープを使い分けている。工場労働者は魚種や味付けの種別、および製品の種類に対応したガムテープの色を憶えなければならない。工場内には作業に間違いがないように壁にローマ字で製品名とガムテープの色の対照表が貼ってある。箱詰めを長年担当しているインドネシア人労働者の中には製品名を表す漢字を認識できるようになっている者もいた。漢字の数はごく限られてはいるが、このように漢字を習得した例は外国人力士の漢字習得法に類似していて興味深い。（宮崎,2001）しかし、工場労働に必要な語彙や漢字の数は極めて限られており、その知識を発展させて日本語力全般を向上させている事例はほとんどないことも分かった。

インドネシア人労働者が最も日本人と直接的な接触をもつのは職場である。そこで、筆者たちはインドネシア人労働者の日本語習得が進まない要因を探るため、職場での実態を観察することにした。まず、農家の協力を得て、終日インドネシア人労働者と共に農作業に従事し、現場で日本語がどのように使用されているのかを参与観察した。この時期はミズナとホウレンソウの収穫が主な作業で、6人のインドネシア人（女性5名、男性1名。滞在年数は1年から5年）がビニールハウスでの収穫、その後の計量と袋詰め作業を行っていた。日本人労働者はいない。全員が近隣の借家や集合住宅でインドネシア人だけの共同生活をし、農家の主人か夫人が朝夕の送迎をする。ビニールハウスではカッターナイフで野菜の根元を切り、泥をつけないように注意しながら、方向を揃えてプラスチックの籠に並べていく。小さな腰掛けに座って行う単純な軽作業で、朝8時から夕方4時頃まで行う。途中で2回の休憩があり、経営

者の夫人が菓子パンと飲み物を差し入れ、就労者と日本語で話をしたり、インドネシア人同士で談笑しながら休憩をとる。収穫が終わるとトラックで移動し、作業小屋で計量と袋詰めを行い、夕方に集荷の大型トラックに引き渡して仕事が終わる。筆者両名には生まれて初めての野菜収穫作業だったが、30分程すると次第に慣れ、熟練した者ほどのスピードではないがさして戸惑うこともなくできるようになった。一日のはじめに主人が手真似を交えてどの温室のどこからどこまで刈り取るかを指示して、後はインドネシア人だけで作業を行う。文字通り単純作業であり、視覚情報だけで作業方法ほぼ確実に憶えられ、言葉の不自由さが原因で間違いを犯す危険がなく、日本語力は必要ではない。

「休暇をとりたい」、「早退したい」、「一時帰国したい」などの多少込み入った相談や交渉を雇用者としなければならないことがあるが、この職場のインドネシア人6名のうち1名がかなりの語彙を知っているので、一語文が中心ではあるが必要なことは通訳できる。また、この農家の主人は独学でインドネシア語を学んでおり、時には農作業や日常生活上で必要なことを十分理解できるインドネシア語で伝達する。また、この農家で働くインドネシア人たちは近くの一軒家を賃貸して共同生活をしており、仕事の後も常にインドネシア語を使って生活していることも分かった。こうしたことから、この農家で働く限り、日本語ができなくても特別な事態が起きない限り、不自由はないことが分かった。

③医療現場の付き添いでの参与観察

調査訪問中に病院や医院への同行と通訳を依頼されることがしばしばあった。インドネシア人と医師の会話を聞いたり、通訳作業を行ったりしながら、インドネシア人が直面する問題を参与観察した。

水産加工業に従事する40代のHLという既婚女性は夫と子供2人と同居している。在日期間は7年、OPI判定は初級-下で、日本語の読み書きは全くできない。以前から肘と首に痛みがあり、それが悪化したため工場を休んでいた。整形外科に行くのに同行してほしいとの依頼があり、水戸市内の整形外科A医院まで車で同行した。医師の「どこが痛いか」の質問には患部を指差して示していた。注射と投薬を受け、その効能をインドネシア語にして伝えた。翌日、症状が悪化したため近所の別のB医院に行き、投薬を受けた。前日と同様にインドネシア語で必要事項を伝えた。以前に症状が悪化したときは所属教会の牧師の婦人に同行してもらい通訳してもらったとのことであったが、その牧師婦人の日本語レベルもOPI初級-下であり、薬や治療についての詳しい説明ができたとは考えにく

い。二日間にわたり通訳をしたが、その間自分の病気に関する語彙を覚えようとしたり、メモを取ろうとすることは全くなかった。労働現場では日本語のできる先輩インドネシア人を通訳者として頼り、自分では日本語を覚えよう努力したり、使ってみようとしたりしない者が多いという話をしばしば聞くが、この二日間のHLの態度もその典型のように思われた。

④産婦人科受診の事例

水産加工業に従事する20代のMCという既婚女性は夫および兄の家族と同居している。在日期間は2年8ヶ月でOPI判定は初級-中であった。ひらがなとかたかなは読める。妊娠7ヶ月目のある日曜日の夜10時頃、礼拝中に気分が悪くなり家族の車で水戸市内のかかりつけの産婦人科C医院に行った。医師からの要請で診断結果を同行した筆者のひとりがインドネシア語でMCに伝えた。普段は日本語レベルの高い兄のMS(OPIは中級-中)に同行してもらっている。この女性は生活と仕事に関する語彙と表現はある程度習得しているが、医療の言葉は分からないものが多く、不安を感じると訴える。辞書は持っておらず、新しい言葉は耳で聞いて覚えている。医師はインドネシア語日本語対訳がついた産婦人科用の患者とのコミュニケーション補助資料を持っており、それを指さすことで重要なことは伝達しているとのことであった。過去に大洗町で出産したインドネシア人女性はほとんどがC医院で出産している。

(3)OPIによる日本語能力測定

大洗地域のインドネシア人就労者の日本語レベルの全体像を把握するために予備調査で種々のテストを試みた結果、OPIが日本語能力測定法として最適であると判断し調査の実施に至った。

教会の協力を得て協力者を募りOPIを実施し、最終的に100件の判定可能なデータを得た

調査の結果、全体で初級-中が最多数の63%であり、初級の上中下をあわせると全体の95%になることが分かった。また、滞在年数が増えても初級-中のままの人が目立つうえに(5年以上で初級-中の者は52%)、10年以上の滞日でも初級-下に留まっている人が2名(2%)いることも分かった。

また、初級-上(16%)が現れるのは5年目以降であり、中級(5%)が現れるのは滞在9年目以降であった。これらの結果からフォーマルな日本語教育を受ける学習者と比べると日本語口頭能力が高まるまでに非常に長い時間がかかっていることが分かった。

(4)聞き取り調査

OPI と併せて、19 項目におよぶ質問紙調査をインドネシア語を用いて対面で行った。質問内容は職場やそれ以外での日本語使用、日本語の学習動機や学習法、渡日前と渡日後の対日イメージの変化、帰国後の将来展望などについてである。状況によっては、話題に沿って調査対象者が自由に語りを展開する場面も見られた

4. 研究成果

インタビュー、参与観察、および OPI の結果、日本語能力の低い者にはインドネシア人コミュニティに依存する傾向が強く、日本語および日本人社会に対して心理的・社会的距離を置いていることが窺われた。他方、日本語能力の高い者は日本人とのネットワークを有しており、心理的・社会的距離も小さいことが窺われた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5 件)

- ① 吹原豊, 移住労働者の言語習得—韓国におけるインドネシア人社会での事例—, 地域文化研究, 査読有, 第 8 号, 2010, 27 - 46
- ② 吹原豊, 日系インドネシア人家族にとっての日本滞在—A 家の事例を中心に—, 武蔵野大学政治経済学部紀要, 査読無, 第 1 号, 2009, 101 - 113
- ③ 吹原豊, 韓国における移住労働者—安山市におけるインドネシア人社会の事例—, 地域文化研究, 査読有, 第 7 号, 2009, 31 - 44
- ④ 吹原豊, 移住労働者にとっての日本滞在—インドネシア人移住労働者による語りから—, 地域文化研究, 査読有, 第 6 号, 2008, 27 - 48
- ⑤ 吹原豊, 外国人移住労働者の生活世界—あるインドネシア人コミュニティの事例—, 武蔵野大学現代社会学部紀要, 査読無, 第 9 号, 2008, 163 - 171

[学会発表] (計 11 件)

- ① 助川泰彦, 吹原豊, Database Kosakata Dasar dan Penerapannya dalam Pengajaran Bahasa Jepang (基本語彙データベースと日本語教育への応用), インドネシア日本語教育学会スラウェシ支部 2010 年度定期セミナー, 2010 年 3 月 13 日, マナド工科短期大学 (発表言語: インドネシア語)
- ② 吹原豊, 滞日外国人コミュニティにおけ

る日本語習得に関する実態調査, JSAA-ICJLE2009 豪州日本研究・日本語教育国際研究大会, 2009 年 7 月 16 日, ニューサウスウェールズ大学

- ③ 吹原豊, インドネシア人移住労働者の生活世界と言語習得—韓国における事例—, 日本移民学会第 19 回大会, 2009 年 7 月 5 日, 同志社大学
- ④ 吹原豊, 助川泰彦, Prasurey mengenei Penggunaan Bahasa oleh Anak-anak Indonesia di Oarai (大洗町におけるインドネシア人随伴子女の言語使用に関する予備的調査), INTERNASIONAL SEMINAR OF THE JAPANESE LANGUAGE TEACHING, 2009 年 3 月 20 日, マナド国立大学 (発表言語: インドネシア語)
- ⑤ 吹原豊, 外国人労働者の日本語習得, 第 7 回フェリス女学院大学日本文学国際会議, 2008 年 12 月 5 日, フェリス女学院大学
- ⑥ 助川泰彦, 吹原豊, 在日インドネシア人就労者の日本語習得を阻害する要因に関する考察, 2008 年度日本語教育学会秋季大会, 2008 年 10 月 12 日, 山形大学
- ⑦ 吹原豊, 助川泰彦, インドネシア人移住労働者の生活世界と日本語習得, 日本移民学会第 18 回大会, 2008 年 6 月 29 日, 東京学芸大学
- ⑧ 助川泰彦, 吹原豊, 在日インドネシア人就労者の日本語習得とその促進要因, 異文化間教育学会第 29 回大会, 2008 年 5 月 31 日, 京都外国語大学
- ⑨ 吹原豊, 助川泰彦, インドネシア人移住労働者の日本語能力調査, 神田外語大学異文研東アプロ調査報告会, 2008 年 3 月 29 日, TKP 東京駅八重洲ビジネスセンター
- ⑩ 助川泰彦, 吹原豊, ミナハサ出身インドネシア人の日本語発音の特徴について, インドネシア日本語教育学会スラウェシ支部学会セミナー, 2008 年 3 月 7 日, インドネシア共和国マナド外国語大学 (発表言語: インドネシア語)
- ⑪ 助川泰彦, 吹原豊, 在日インドネシア人労働者の日本語能力, インドネシア日本語教育学会スラウェシ支部学会セミナー, 2008 年 3 月 7 日, インドネシア共和国マナド外国語大学 (発表言語: インドネシア語)

[図書] (計 2 件)

- ① 吹原豊, 明石書店, 日本のインドネシア人社会 第 2 章 日本への関心と日本語学習: インドネシアにおける日本語教育の課題, 2009, 69-84

- ② 助川泰彦, 吹原豊, 明石書店, 日本のインドネシア人社会 第6章インドネシア人労働者の日本語自然習得: 茨城県大洗町の事例から, 2009, 157-172

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

○取得状況 (計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

助川 泰彦 (SUKEGAWA YASUHIKO)
東北大学・国際交流センター・教授
研究者番号: 70241560

(2) 研究分担者

吹原 豊 (FUKIHARA YUTAKA)
福岡女子大学・国際文理学部・講師
研究者番号: 60434403